

現代中国学部「中国民俗資料室」の開設によせて

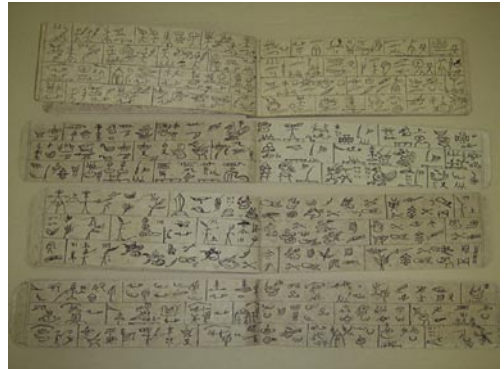
現代中国学部 松岡正子

2004年春、現代中国学部は「中国民俗資料室」を開設した。中国は、13億の人口と56の民族、日本の25倍の国土、3千年以上の歴史と文化をもち、歴史的に日本と密接な繋がりをもつ巨大な国である。このような国を、一体、どのような視点から理解すればよいのか。中国民俗資料室の目的は、民俗文化の視点から、日常生活で使われてきた民具や民族衣装、民間美術や楽器などの「モノ」を自ら見る、聞く、触れることによって、中国の生活風景や伝統文化について理解を深めることにある。

中国民俗資料室のテーマは、(1) 漢族と少数民族、(2) 女性と子供、(3) 民間美術と楽器の3つである。収藏品としては、(1) については、多数の民族集団が集中する西南中国から四川省のチベット族・チャン族・イ族、貴州省のミャオ族・トン族・スイ族、雲南省のナシ族・プミ族・ハニ族・タイ族、および漢族をとりあげ、各民族集団を代表する民族衣装や装飾品、生活用具類、宗教およびシャーマンに関する経典や法器、衣装など、(2) については、伝統的な形がよく伝えられている嫁入り道具や台所用具、茶器、子供の衣服や玩具など、(3) については、中国独特の民間芸術として、春節（旧正月）に飾る民間版画「年画」、皮影（影絵）人形や木偶人形、民族楽器など、あわせて約400点である。



雲南省シャングリラ県のトンパ



トンパ文字でかかれた経典

展示は、常設展（名古屋校舎東教室棟3階・中国民俗資料室）と年2回の企画展、およびホームページで行う。常設展では、1900年代中期の家具や民具によって漢族の「堂屋」（母屋の居間）と女性の部屋の再現を試みている。企画展は、第1回「雲南省・ナシ族展—トンパ文化と火葬」を、2004年11月13日と14日（愛大祭期間中）、名古屋校舎中央教室棟102において現代中国学部松岡正子ゼミとの共催で実施した。在校生や御父兄をはじめとして卒業生、愛大受験をめざす高校生、他大学生、近隣の方々など約350名の来場者があり、盛況であった。現代中国学部にとっては昨年の「COL採択記念—愛知大学における中国研究」に続く企画展である。第2回以降は、「中国雲南省・ナシ族のトンパ文化」（2004年12月～、名古屋図書館）、「年画展—武強と楊柳青」、「貴州省・ミャオ族、スイ族、トン族—暮らしと民族衣装」、「人形展—皮影人形と木偶人形」、「四川省・チャン族とチベット族」、「民具展」などを予定している。

「ナシ族展—トンパ文化と火葬」の内容は、つぎのようである。ナシ族は、総人口約31万人（2000年）、雲南省西北部の海拔高度1500～3000メートルの盆地や丘陵部に居住する。「ナシ」を自称としたナシ語の西部方言を話す集団と、「モソ」を自称とした東部

方言を話す集団に大別される。このうち「ナシ」集団は、人口の約9割を占め、麗江ナシ族自治県やシャングリラ県南部に分布する。明代以降、土司の木氏は積極的に漢文化をとり入れながら「ナシ古王国」を築いた。麗江古城は1997年にユネスコ世界遺産に登録された。シャーマン「トンパ」を中心とした「トンパ教」と象形文字「トンパ文字」に代表される「トンパ文化」が内外に知られている。これに対して「モソ」集団は、寧蒗県のロコ湖周辺に居住し、「アチュ婚」とよばれる妻問い婚を行い、母から娘へと家を継承する母系社会を形成する。シャーマン「ダバ」を中心とした土着の自然崇拜とチベット仏教を信仰し、ラマの誦経のもとで火葬を行う。またモソ人は、自分たちがナシ族の一支系ではなく、独立した民族集団であると主張する。

「ナシ族展」は、今夏、シャングリラ県東壩村と寧蒗県ロコ湖でフィールドワークを行った松岡ゼミの学生17人によるパネル報告と、資料室が現地で収集した民俗資料の展示からなる。松岡ゼミは、2000年から毎年、雲南省社会科学院などの協力を得て雲南省や貴州省を中心に中国語によるフィールドワークを行っている。今回のパネル報告では、「ナシ」については家族・食・住・教育・トンパ・古楽・トンパ文字、「モソ」についてはアチュ婚・火葬を小テーマとして、現地で得た映像資料や聞き取り調査の結果をまとめた。なかでも現役最高齢の老トンパ（91歳）へのインタビューや、住民が頭痛を治してもらいにトンパを訪れた時の治病現場の記録、出棺から火葬場までの火葬の実録は、それらに遭遇してきたこと自体が強運であり、フィールドワークならではの価値がある。学生たちは現地での経験に加えて、会場で来場者の質問に答え、説明することによって一層確かな何かを得たものと思われる。指導教官としては、御父兄が多数来場され、学生の説明を受けながら楽しそうに展示をみておられたことが大変うれしかった。

中国民俗資料室が収集・展示した民俗資料は、「ナシ」と「モソ」の民族衣装、トンパ教の経典や法器、儀式用の「神路図」「木牌画」「巻軸画」である。民族衣装には、山間部の東壩村と都市部の麗江、ロコ湖落水郷のモソ村

の3つの地域で暮らす老若男女の日常着とハレ着、シャーマン「トンパ」の儀式衣装が含まれる。山間部では麻を栽培して糸を繕い、男女とも日本の着物に似た長着を帯紐で巻いて留める。麗江では男性はヤギ皮のベスト、女性は太陽と月と7つの星を表す飾りをつけたヤギ皮の肩掛けをかける。モソの未婚女性は真紅の短い上着に白いプリーツスカート、華やかな花の髪飾りをつける。民族衣装は帰属集団の違いを表すだけでなく、集団内での位置やなすべき役割、地域の自然や生活を反映しており、興味深い。

トンパ教の「神路図」や「木牌画」、「巻軸画」（タンカ、麻布に鉱物顔料を用いて描いた神像画）、トンパ文字でかかれた経典は、今回の展示品の中では最も資料的価値が高い。「神路図」は、ナシ語で「ハリ」、幅約23センチ、長さ約630センチ、紙製（ナシ族独自の紙漉きによる）で、葬儀や「超度亡霊」（施餓鬼）の時に靈魂を導く道として用いる。33の天界と人間界、18の地獄界を百余りの連続画で描く。「木牌画」は、ナシ語で「クピャ」、幅約10センチ、長さ約60センチ、マツの板製で、地面に挿して神壇を作る。神々を描いた先端を尖らせた形のもの、鬼を描いた先端の平らな形の2種類がある。これらはトンパが自ら描き、あるいは代々伝承してきたもので、儀式によって使用する木牌が異なる。今回の「神路図」は百年以上伝えられてきたとされ、「木牌画」も作者の老トンパがすでに故人であるため、ともに極めて貴重である。なおトンパ関係の資料は、12月より名古屋図書館にて展示を予定している。



ナシ族展—トンパ文化と火葬—